

# インドネシア

よね くら ひとし  
米 倉 等

## はじめに

インドネシアとの交流の拡大、緊密化とともに日本におけるインドネシア研究は一段と深まりを見せている。従来、ともすれば、その制度的紹介に留まりがちだった経済・社会研究も実態調査にもとづいた分析に著しい展開がみられる。本稿は本誌第200号以降のインドネシア研究を社会科学の分野に絞って概観する。筆者自身の専門および200号では政治が中心に検討されたことなどを考慮して、今回は経済と農業を中心に概観する。

## I 経済・農業

1984年、インドネシア大学のドロジャトン講師がアジア経済研究所を訪問、インドネシア研究者と懇談した際、インドネシアで必要なものはや成長論や計画論ではなく、企業のマネージメントであり企業家だと語っていたのが強く印象に残った。スハルト体制下の開発計画を長くリードしてきたウィジョヨが、第3次開発内閣を最後に国家開発企画庁長官を辞したのはこのような時代の流れかと思われた。

世界銀行やIMFの指導のもとで経済政策の基本が従来の輸入代替から輸出指向工業化に転換

し、インドネシアでも遅ればせながら1970年代にその具体化が進んだ。この間の国内の産業の発展には著しいものがあった。しかしそれは石油に支えられた財政と、インドネシアの豊富な資源を当て込んだ外資の進出の賜物であった。開放された外資とともに技術が入ってくる。それを積極的に取り入れる受け皿作りとして、科学技術担当大臣ハビビの下で技術政策の積極的展開が始まった。しかし、資本と技術を結合させ生産に結び付ける企業の多くが国営であったり、形のうえでは私企業でも実際は軍人・テクノクラート官僚出身者が重要な地位にいる場合が多い。資金・技術の面でも人的資源の面でも行政すなわち国家の役割が大きい。だが民族企業家の本格的な生成なくして経済の自立的成長・発展はあり得ない。企業経営を合理的・効率的に行なえるマネージメントの技術と、それをもった企業家が強く求められている。ドロジャトンの発言はこのようなインドネシアの状況を踏まえたものだったといえよう。

企業経営や企業家に関する研究がみられるようになったのは、国家の利権や外資に癒着した華人資本家やプリプミ（この表現は本稿が対象としている1970年代末以降公式には使われなくなった）資本家の生成のゆえである。代表的企業家としてあげられるのはプルタミナの元総裁ストオであろう。ストオが国家権力との密接な関係を基礎にのしあが

ったのに対し、外資との結び付きのなかで抬頭した企業家の代表の一人がムハマッド・ゴベルであろう。彼らについては久保田政純「プルタミナとイブヌ・ストオ」〔29〕、山崎国光「インドネシアにおけるプリプミ企業経営者の生成と発展」〔85〕がさしあたり参考になる。インドネシアの民間部門を依然として牛耳るのは、政治権力に取り入った華人系の企業である。しかし彼らについての研究はまだ緒についたばかりといってよい。さしあたり、石橋重雄「インドネシアにおける華僑財閥の発展」〔5〕、北原保之「インドネシア企業のダイナミズムを探る」〔27〕、佐藤百合「インドネシアにおける民間企業グループの生成・発展過程」〔36〕などがある。日系合弁企業の経営に関する議論としては村山元英「民族的経営の基礎」〔82〕、市村真一「Japanese Management in Indonesia」〔6〕がある。インドネシア人労働者に焦点を当てたものとしては坪内良博〔54, 55〕が貴重である。

インドネシア経済の諸側面を押えるうえでテー・キアン・ウィー編『インドネシアの経済』〔57〕は有用である。個々の産業に関しては産業組織論的視点からの実態調査にもとづいた三平則夫による繊維産業〔75〕、自動車産業〔76〕、電機・電子産業〔77〕、岩崎輝行による肥料産業〔7〕に関する研究がある。マクロ経済分析としてはマクロ計量経済モデルがアジア経済研究所とインドネシア中央統計局によって作成されている〔48〕。さらに、金融セクターについてモデルを作成した江崎光男〔13〕、経済発展を論じた高木保興〔49〕などの研究がある。産業構造・貿易関係のための基礎研究としてアジア経済研究所編『日本・インドネシア国際産業連関表—1975—』〔1〕が作成されているが、その本格的利用と分析が今後期待され

る。

貿易と直接投資を通じた日本との経済関係は一段と強まっている。とりわけ1970年代以降の直接投資の増加は著しい。日本の直接投資に関する実証研究としてはテー・キアン・ウィー他〔56〕がある。石油部門を除けば日本はインドネシアに対する最大の投資国である。同時に2国間援助では日本が最大の援助国である。このような経済関係の拡大強化とともに、インドネシア経済に関する情報は急増し、とりわけビジネス情動的なものは氾濫しているといってもよい。しかしインドネシア経済の本質に迫るような地道な研究は、経済関係の強化拡大の著しさに比すれば意外に少ないように思われる。

経済の動態化、なかんずくその工業化は農業から工業へあるいは農村から都市への人口移動を加速させた。その実態とパターンの研究に関しては、金子元久「インドネシアの労働力移動1961-1979年」〔20〕、川本岩夫「ジャワでの都市部への人口移動の背景と属性」〔26〕、福家洋介「西ジャワ（パダレック村）の出稼ぎ農民」〔68〕などがある。他の多くの途上国同様、人口移動に伴って首都ジャカルタを中心とした都市人口の急増とスラム化が社会問題として深刻化した。この点については早瀬保子「ジャカルタのスラム」〔64〕がある。人口学的基礎研究に関しては上田耕三「インドネシアにおける人口調査の発展」〔9〕、スダグ農村での実態調査にもとづく五十嵐忠孝「個人年齢の推定方式に関する若干の覚え書き」〔3〕がある。

貧困層の抽出とその実態報告に関して、村井吉敬〔81〕がある。村井はまた〔80〕において彼らの経済活動を「民衆生業」という捉え方をして、貧困層の就業と生活の実態を存在感のある表現で概念化している。開発政策がもたらす歪みのひと

つとして所得分配の不平等化が指摘されるが、この点について統計的検討を加えた研究として米田公丸〔89〕がある。開発に伴う土地紛争の事例は水野広祐〔73〕に詳しい。

実態調査にもとづくオリジナルかつ本格的実証研究が進んだ点が本誌200号以降のインドネシア研究、とりわけジャワ農村研究の特徴である。この分野の調査事例としては、加納啓良による『パグララン』〔22〕、『サワハン』〔23〕の二つのモノグラフのほか、白石隆「デサ・ンガラン」〔41〕、水野正巳「ジャワ農村における生業構造」〔74〕などがある。

ジャワ農村社会を理解する視点として支配的な地位を占めてきたのがギアツの「農業インボリューション」や「貧困の共有」の概念である。これにたいし、ウィリアム・コリアらの指導を受けたボゴールの農村経済調査会 (Survey Agro-Ekonomi) による多数の農村実態調査を始めとして上記の日本人による実証研究も含む一連の研究により、ジャワ農村がギアツの概念では捉えられない動的な過程のなかにあり、社会的紐帯は弛緩しつつあること、土地なし層の存在などジャワ農村社会は異質な社会集団から構成されているという事実が明らかにされてきた。この点について見事な整理と問題提起をしているのが加納「ジャワ農村経済史研究の視座変換」〔21〕以下一連の研究である。土地なし層の存在を統計的に確認しているのが同じく加納〔25〕である。他方、原洋之介は『クリフォード・ギアツの経済学』〔66〕において、ギアツの社会認識の方法に着目しながら、インドネシアを含む東南アジアの経済発展を論じるうえで新古典派理論を超えるべくユニークな視点を提供した。とりわけ市場における価格形成の原理、農民の行動原理の基礎としての方法論的個人主義の非

妥当性、制度的変化を性格づける十分条件としての社会組織の在り方に着目している。

最近のインドネシア農業に関する研究は緑の革命の影響に主たる焦点が当てられたといえる。なかでも速水・菊池による *Asian Village Economy at the Crossroads*〔65〕が特筆される。著者らと国際稲研究所および前出の農業経済調査会との共同研究にもとづくもので、フィリピンとインドネシア各2カ村計4カ村の比較を行なっている。高収量品種と化学肥料を利用する農業技術変革による影響を、特に農業労働慣行の変化を中心に分析した点が注目される。ジャワの農業労働慣行の整理と分析をしたものとして、米倉等「ジャワ農村における階層構成と農業労働慣行」〔88〕がある。ジャワ以外のいわゆる外島に関しては岩崎輝行「西スマトラの農業労働供給」〔8〕、米倉等「西スマトラにおける水稻生産の発展」〔87〕がある。

## II 政治・歴史・社会

現代政治研究は意外に少なかったのがここ数年の特徴と言える。スハルト体制の統制色の強まりから政治研究が難しい状況を反映したものであろう。そんななかで梅沢達雄「スハルト政権の経済建設と『新秩序』体制」〔12〕、木村宏恒「インドネシアの開発と軍・官僚国家」〔28〕、鈴木祐司『東南アジアの危機の構造』〔44〕などの研究がある。

独立からスハルト体制の発足までの政治展開を対象にしたものとして永井重信『インドネシア現代政治史』〔61〕がある。また元副大統領アダム・マリクの自伝の翻訳〔72〕は、独立闘争から現在の開発計画の時代に至るまで、インドネシア政治の内側に位置し続けた政治家の内外の問題に対する見解を知るうえで貴重である。増田与はスカル

ノのいわば黒子として活躍した郷梓模の自伝を編訳紹介している〔52〕。外交に関しては首藤素子が精力的に研究を行なった〔37, 38〕。田口三夫『アジアを変えたクーデター』〔50〕は9.30事件による体制変化の過程での日・イ関係を記録して貴重である。戦前期の日・イ関係についてここ数年、後藤乾一が精力的に取組み著作に纏めている〔35〕ほか、日本軍政とインドネシア独立について研究を進めている〔33, 34〕。倉沢愛子は、軍政下の食糧調達について詳細な研究を行なっている〔30, 31〕。

民族主義研究には大きな成果があった。まず永積昭の『インドネシア民族意識の形成』〔62〕は、ジャワを越えたインドネシアとしての民族主義の起源と展開を、歴史の流れに沿って平明な語り口で説得的に展開した。土屋健治はタマン・シスワの成立と展開に関する研究を『インドネシア民族主義研究』〔53〕に纏めた。白石隆〔40, 42〕、深見純生〔67〕らの一連の研究も注目される。カルティニに関する研究が翻訳された〔45〕ことも忘れられてはならない。

歴史研究においては、ジャワ農村とりわけ19世紀の土地制度を中心にした研究が活発に行なわれている。田中則雄「19～20世紀におけるジャワ農村(desa)の変容」〔51〕、内藤能房「19世紀後半のジャワにおける人口と耕地」〔58〕、植村泰夫「ジャワの共同占有の解体をめぐって」〔10〕、宮本謙介「オランダ植民地支配とジャワ社会の再編成」〔79〕などがある。いま一つは糖業史に関する研究が充実している。植村「糖業プランテーションとプスキ農村社会」〔11〕、加納「ジャワ糖業史研究序説」〔24〕、宮本「中部ジャワにおける地主制の形成と甘蔗プランテーション」〔78〕などがある。

以上はいずれもジャワに関する歴史研究だが、

外島についてもたとえば大木昌『インドネシア社会経済史研究』〔16〕、同じく「19世紀スマトラ中・南部における河川交易」〔14〕、「植民地期インドネシアにおける在来鉱工業の衰退」〔15〕など優れた研究がある。他にも、アチェに関する白石さや「ヒカヤット=アチェについての一考察」〔39〕、鈴木恒之「17世紀スマトラ島におけるオランダの貿易独占体制」〔43〕などがある。ジャワ以外といってもスマトラが中心だが歴史家の関心が高く、研究が進みつつあることが分かる。

ギアツを批判的に検討しつつジャワ社会の本質に迫るのが間亭谷栄「現代インドネシア研究」〔71〕、人類学の立場からジャワ人、ジャワ農村の観念と伝統慣行に切り込んだ関本照夫の研究〔46〕がある。サウイト事件を材料にクバティナンにおける伝統的文化概念を検討しているのが同〔47〕である。外島の社会についてはまず、西スマトラのミナンカバウ族の母系制と出稼ぎ慣習(ムランタウ)について加藤剛の優れた研究 *Matriliny and Migration*〔17〕があげられる。母系制の存続を移住と関連づけ、この研究以後、加藤は都市におけるミナンカバウ族の実態研究をすすめている〔18, 19〕。北スマトラのマングダイリン・バタックの社会組織に関しては安中章夫の慣習法に関する紹介がある〔84〕。クンチャラニングラット編著『インドネシアの諸民族と文化』の翻訳〔32〕は、多様なインドネシアの民族の正しい理解を深めるうえで貴重である。経済発展によって都市社会を中心に新しい中間層の生成があり、この点に関する議論を伝えるものとして、『プリズマ』誌掲載の何本かの論文を纏めて翻訳した『インドネシアの政治社会変動と新中間層の擡頭』〔4〕がある。

イスラム研究の分野では中村光男, *The Crescent Arises over the Banyan Tree*〔60〕がある。ジョ

クジャカルタ近郊コタグデのモハマディアの人類学的調査である。ナフダトル・ウラマの大会に取材した同じく中村の報告〔59〕は現代イスラムの政治とのかかわり、急進的伝統主義の背景を検討するうえで示唆にとむ。アリフィン・ベイは『近代化とイスラム』〔70〕において、日本、トルコ、イラン、インドネシアに言及してイスラム文化における近代化の意味を論じ、イスラムが近代文明の危機打開の道を探る出発点を与えるものだと主張する。ウラマとイスラム教育の伝統とその変化について、インドネシア人研究者の論文を翻訳した『インドネシアのイスラム』〔2〕は政治・社会勢力としてのイスラムの将来を検討するうえで重要である。

## む す び

最後に、以上の本誌200号以降の研究状況の概観から気づくいくつかの特徴を指摘したい。第1に、経済分野での研究は産業別の現地調査にもとづいた研究に成果があったが、中間層の抬頭あるいは企業家や企業グループに関する研究は緒に付いたばかりと言えよう。発展の目覚ましいインドネシア経済を総括的に把握するには、いままし時間を要するものと思われる。第2に、農工間あるいは農村・都市間の人口移動、都市化問題、都市社会における実態研究は重要な課題だ。深刻なスラム化や雇用問題の緊要性ゆえに研究者の関心をいち早くひいた。しかし貧困層の生活実態の究明はまだ十分とはいえない。第3にジャワ農村社会に関する研究は層が厚く、実態調査においてもまた歴史研究においても大きな成果を挙げている。農業発展研究では緑の革命を中心とする技術変革の影響に焦点が当てられた。だが、その国民経済

的意義（たとえば米の自給化など）の検討、農業政策や制度の実態解明の点では十分ではなかった。第4に民族主義、政治史研究に大きな成果があった。現代インドネシアの政治社会状況を理解するうえで民族的・文化的・宗教的さらには地域的な底流を把握することがいかに重要であるかが納得される。この点に関連して、第5にジャワ以外の外島についても次第に研究者の関心が高まっていることがわかる。歴史家のスマトラへの関心、本稿では触れられなかったが人類学者によるスラウェシおよび東インドネシアへの関心が特に注目される。第6に研究方法に関して、インドネシア人自身の研究蓄積によってインドネシア語文献利用の重要性がますます高まっているのに加え、フィールドワークによる研究成果が質的量的に格段の進歩を見せている。欧米研究者による成果に依拠した研究の上塗りから一歩進んだオリジナリティが求められている。一連のギアツ批判もこのような研究状況を反映しているといえる。

今後の研究方向として特に期待される点を三つ、最後に述べておきたい。まず第1に、経済発展のダイナミズムを支える企業家や企業グループの実態研究であり、インドネシア経済の資本形成とテイクオフの如何である。第2に、開発政治を支える軍・ゴルカルを中心とした政治体制の本質、国家原理として掲げられているパンチャシラの持つ政治的社会的意味を問うことである。第3に、インドネシア経済・社会の歴史的理論的把握という課題である。ブーケの二重構造論あるいはギアツのジャワ認識に関する批判が出尽くしたとは思われないが、彼らを超えるスケールの大きな概念構成に正面から取り組む努力も必要であろう。

## 〔文献リスト〕

- [1] アジア経済研究所編『日本・インドネシア国際産業連関表——1975——』1981年。
- [2] タウフィック・アブドゥラ編 白石さや・白石隆訳『インドネシアのイスラム』めこん 1985年。
- [3] 五十嵐忠孝「個人年齢の推定方式に関する若干の覚え書き——西部ジャワ・スンダ人村落での調査から——」(『東南アジア研究』第20巻第2号 1982年9月)。
- [4] 井草邦雄編訳『インドネシアの政治社会変動と新中間層の擡頭』アジア経済研究所 1985年。
- [5] 石橋重雄「インドネシアにおける華僑財閥の発展——権力構造との係りの中で——」(『国際情勢』第56号 1984年3月)。
- [6] Ichimura, Shinichi, “Japanese Management in Indonesia” (『東南アジア研究』第23巻第1号 1985年6月)。
- [7] 岩崎輝行「インドネシア」(坂梨晶保・林俊昭編著『発展途上国の肥料産業』アジア経済研究所 1979年)。
- [8] 岩崎輝行「西スマトラの農業労働供給」(『アジア経済』第24巻第2号 1983年2月)。
- [9] 上田耕三「インドネシアにおける人口調査の発展」(『東南アジア研究』第20巻第2号 1982年9月)。
- [10] 植村泰夫「ジャワの共同占有の解体をめぐる」(『東洋史研究』第38巻第4号 1980年3月)。
- [11] 植村泰夫「糖業プランテーションとブスキ農村社会」(『史林』[京都大学文学部] 第66巻第2号 1983年3月)。
- [12] 梅沢達雄「スハルト政権の経済建設と『新秩序』体制」(I)(II) (『アジア経済』第22巻第7, 8号 1981年7, 8月)。
- [13] Ezaki, Mitsuo, “An Econometric Model of Indonesia with Particular Reference to the Monetary Sector: 1970-1980” (『東南アジア研究』第21巻第2号 1983年9月)。
- [14] 大木昌「19世紀スマトラ中・南部における河川交易——東南アジアの貿易構造に関する一視角——」(『東南アジア研究』第18巻第4号 1981年3月)。
- [15] 大木昌「植民地期インドネシアにおける在来鉱工業の衰退——西スマトラの事例——」(『アジア経済』第23巻第12号 1982年12月)。
- [16] 大木昌『インドネシア社会経済史研究——植民地期ミナンカバウの経済過程と社会変化——』勁草書房 1984年。
- [17] Kato, Tsuyoshi, *Matriliney and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia*, イサカ, Cornell University Press, 1982年。
- [18] 加藤剛「都市と移住民——ジャカルタ在住ミナンカバウの事例——」(『東南アジア研究』第21巻第1号 1983年6月)。
- [19] 加藤剛「インドネシアの都市にみる種族結合——ネットワークと同郷会——」(『東南アジア研究』第23巻第4号 1986年3月)。
- [20] 金子元久「インドネシアの労働力移動 1961-1979年——中部ジャワ州の人口流出入を中心とした分析——」(『アジア経済』第21巻第5号 1980年5月)。
- [21] 加納啓良「ジャワ農村経済史研究の視座変換——『インボリューション』テーゼの批判的検討——」(『アジア経済』第20巻第2号 1979年2月)。
- [22] 加納啓良『パグララン——東部ジャワ農村の富と貧困——』アジア経済研究所 1979年。
- [23] 加納啓良『サワハン——開発体制下の中部ジャワ農村——』アジア経済研究所 1981年。
- [24] 加納啓良「ジャワ糖業史研究序説」(『アジア経済』第22巻第5号 1981年5月)。
- [25] 加納啓良「インドネシアにおける『土地なし』農村世帯の存在形態」(滝川勉編著『東南アジア農村の低所得階層』アジア経済研究所 1982年)。
- [26] 川元岩夫「ジャワでの都市部への人口移動の背景と属性」(『東南アジア研究』第23巻第1号 1985年6月)。
- [27] 北原保之「インドネシア企業のダイナミズムを探る」(『国際経済(臨時増刊)インドネシア特集——アジアの資源大国の明日——』1982年)。
- [28] 木村宏恒「インドネシアの開発と軍・官僚国家——新体制の研究——」(1)(2)(3)(『熊本法学』第36, 37, 38号 1983年5, 9月, 1984年1月)。
- [29] 久保田政純「プルトミナとイブヌ・ストオ——インドネシアの公企業——」(伊藤楨一編著『東南アジアにおける工業経営者の生成』アジア経済研究所 1980年)。
- [30] 倉沢愛子「日本軍政下のジャワにおける米穀流通政策」(『アジア経済』第21巻第11号 1980年11月)。
- [31] 倉沢愛子「ジャワの村落における社会変容の一考察——日本軍政下の初供出制度とその影響——」(『東

- 南アジア研究』第19巻第1号 1981年6月)。
- [32] クンチャラニングラット編著 加藤剛・土屋健治・白石隆訳『インドネシアの諸民族と文化』めこん 1980年。
- [33] 後藤乾一「シンガパルナ事件に関する一考察……日本軍政期におけるインドネシアの抵抗運動——」(『社会科学討究』第26巻第2号 1981年6月)。
- [34] 後藤乾一「日本軍政とインドネシア独立問題——日本側関係者の回想録を手掛かりに——」(『社会科学討究』第30巻第1号 1984年9月)。
- [35] 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア——1930年代「南進」の論理・「日本観」の系譜——』勁草書房 1986年。
- [36] 佐藤百合「インドネシアにおける民間企業グループの生成・発展過程」(『アジアトレンド』第31号 1985年夏)。
- [37] 首藤素子「スハルト新体制初期の対外関係——対米外交の回復過程とその特質について——」(『政治学論集』〔一橋大学法学部〕第17号 1983年3月)。
- [38] 首藤素子『『インドネシア』成立時の国際環境研究(1)——1946年における外交交渉の経緯と問題点について——』(『政治学論集』〔一橋大学法学部〕第19号 1984年3月)。
- [39] 白石さや「ヒカヤット=アチェについての一考察」(山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会編『山本達郎博士古稀記念 東南アジア・インドの社会と文化(上)』山川出版社 1980年)。
- [40] 白石隆「初期イスラム同盟(1912-17年)」(1)(2) (『アジア経済』第22巻第7, 8号 1981年7, 8月)。
- [41] 白石隆「デサ・ンガラ——ゴルカルの村——」(『経済学論集』〔東京大学経済学部〕第47巻第3号 1981年10月)。
- [42] 白石隆「スラカルタ 1919年——インドネシア民族主義と農民——」(『東洋文化研究所紀要』第90冊 1982年)。
- [43] 鈴木恒之「17世紀スマトラ島におけるオランダの貿易独占体制」(日蘭学会編『オランダとインドネシア——歴史と社会——』山川出版社 1986年)。
- [44] 鈴木祐司『東南アジアの危機の構造』勁草書房 1982年。
- [45] シティスマンダリ・スロト著 舟知恵・松田まゆみ訳『民族意識の母カルティニ伝』井村文化事業社 1982年。
- [46] 関本照夫「二者関係と経済取引——中部ジャワ村落経済生活の研究——」(『国立民族学博物館研究報告』第5巻第2号 1980年6月)。
- [47] 関本照夫「サウイト事件の文化論的考察」(鈴木中正編『千年王国的民衆運動の研究』東京大学出版会 1982年)。
- [48] Central Bureau of Statistics (Indonesia), "A Macro-Economic Model of Indonesia," Statistics Department, IDE., *Econometric Link System for ASEAN: Final Report Vol. I*, 東京, Institute of Developing Economies, 1985年。
- [49] 高木保興「インドネシアの経済発展」(『東南アジア研究』第19巻第3号 1981年12月)。
- [50] 田口三夫『アジアを変えたクーデター——インドネシア9.30事件と日本大使館——』時事通信社 1984年。
- [51] 田中則雄「19~20世紀におけるジャワ農村(desa)の変容——ナブラック, プカロンガン(中部ジャワ, パティ県)の2村について——」(『南方文化』〔天理大学〕第9号 1982年11月)。
- [52] 鄒梓模著 増田与編訳『スカルノ大統領の特使——鄒梓模回想録——』中央公論社 1981年。
- [53] 土屋健治『インドネシア民族主義研究——タマン・シスワの成立と展開——』創文社 1982年。
- [54] 坪内良博「日本人の目からみたインドネシア人勤労者」(『東南アジア研究』第15巻第2号 1977年9月)。
- [55] 坪内良博「日系合弁企業におけるインドネシア人作業員」(『東南アジア研究』第15巻第3号 1977年12月)。
- [56] テー・キアン・ウィー他 水野広祐訳『インドネシアに対する日本の直接投資——試験的調査の結果——』アジア経済研究所 1979年。
- [57] テー・キアン・ウィー編 加納啓良・村井吉敬・水野広祐訳『インドネシアの経済』めこん 1984年。
- [58] 内藤能房「19世紀後半のジャワにおける人口と耕地——ギアツの『インボリューション』説との関連において——」(『オイコノミカ』〔名古屋市立大学〕第18巻第2号 1981年9月)。
- [59] Nakamura, Mitsuo, "The Radical Traditionalism of the Nahdlatul Ulama in Indonesia" (『東南アジア研究』第19巻第2号 1981年9月)。
- [60] Nakamura, Mitsuo, *The Crescent Arises over*

- the Banyan Tree*, ヨクヤカルタ, Gajah Mada University Press, 1983年。
- [61] 永井重信『インドネシア現代政治史』 勁草書房 1986年。
- [62] 永積昭『インドネシア民族意識の形成』 東京大学出版会 1980年。
- [63] 日蘭学会編『オランダとインドネシア——歴史と社会——』 山川出版社 1986年。
- [64] 早瀬保子「ジャカルタのスラム——住民の特性と意識——」(『アジア経済』 第25巻第4号 1984年4月)。
- [65] Hayami, Y.; M. Kikuchi, *Asian Village Economy at the Crossroads*, 東京, University of Tokyo Press, 1981年。
- [66] 原洋之介『クリフォード・ギアツの経済学——アジア研究と経済理論の間で——』 リプロポート 1985年。
- [67] 深見純生「インドネシアにおける労働運動の形成と展開——1920年の高揚まで——」(『歴史学研究』 第515号 1983年4月)。
- [68] 福家洋介「西ジャワ(パダレック村)の出稼ぎ農民」(『アジア研究』 第32巻第3/4号 1986年1月)。
- [69] J・H・ブーケ著 永易浩一訳『二重経済論——インドネシア社会における経済構造分析——』 秋葉書房 1979年。
- [70] アリフィン・ベイ『近代化とイスラム』 めこん 1981年。
- [71] 間学谷栄『現代インドネシア研究』 勁草書房 1983年。
- [72] アダム・マリク著 尾村敬二訳『共和国に仕える——インドネシア副大統領アダム・マリク回想録——』 秀英書房 1981年。
- [73] 水野広祐「1970年代後半におけるインドネシア土地紛争とその特質」(滝川勉編著『東南アジア農村の低所得階層』 アジア経済研究所 1982年)。
- [74] 水野正巳「ジャワ農村における生業構造——中ジャワ州パニユマス県での調査より——」(『農業総合研究』 第33巻第4号 1979年10月)。
- [75] 三平則夫「インドネシア」(アジア経済研究所編『発展途上国の繊維産業』 1980年)。
- [76] 三平則夫「インドネシア」(アジア経済研究所編『発展途上国の自動車産業』 1980年)。
- [77] 三平則夫「インドネシア」(アジア経済研究所編『発展途上国の電機・電子産業』 1981年)。
- [78] 宮本謙介「中部ジャワにおける地主制の形成と甘蔗プランテーション」(『一橋論叢』 第81巻第5号 1979年5月)。
- [79] 宮本謙介「オランダ植民地支配とジャワ社会の再編成——19世紀の土地制度を中心に——」(『歴史学研究』 第497号 1981年10月)。
- [80] 村井吉敬「インドネシアの民衆生業」(『アジア研究』 第24巻第4号 1978年1月)。
- [81] 村井吉敬「インドネシアの貧困層——西ジャワの就業構造からみた農村貧困層——」(滝川勉編著『東南アジア農村の低所得階層』 アジア経済研究所 1982年)。
- [82] 村山元英「民族的経営の基礎——インドネシアのプリブミ経営者像をめぐって——」(伊藤楨一編著『東南アジアにおける工業経営者の生成』 アジア経済研究所 1980年)。
- [83] 森弘之「1867年のジャワ未墾地調査について」(『史苑』 [立教大学文学部] 第41巻第1号 1981年4月)。
- [84] 安中章夫「スマトラ・南タバヌリの慣習法」(『アジア経済』 第27巻第4号 1986年4月)。
- [85] 山崎国光「インドネシアにおけるプリブミ企業経営者の生成と発展——P. T. ナショナル・ゴーベルの事例——」(伊藤楨一編著『東南アジアにおける工業経営者の生成』 アジア経済研究所 1980年)。
- [86] 米倉等「インドネシアの米をめぐる食糧政策」(山田二郎編著『食糧需給の将来と農業政策』 アジア経済研究所 1983年)。
- [87] 米倉等「西スマトラにおける水稻生産の発展——その要因と影響——」(I)(II) (『アジア経済』 第25巻第2, 3号 1984年2, 3月)。
- [88] 米倉等「ジャワ農村における階層構成と農業労働慣行」(『アジア経済』 第27巻第4号 1986年4月)。
- [89] Yoneda, Kimimaru, "A Note on Income Distribution in Indonesia," *Developing Economics*, 第23巻第4号, 1985年12月。
- [90] 早稲田大学社会科学研究所 インドネシア研究会編『インドネシア——その文化・社会と日本——』 早稲田大学出版部 1979年。  
(アジア経済研究所調査研究部)